

国際耕種と私・長谷川繁弥<その4>

JICA 筑波研修の思い出と今後への期待

JICA 筑波で国際耕種として初めての野菜栽培指導となるタジキスタン国の研修では、来日直後の8月末に苗を定植し帰国前の11月末までに熟果を収穫するトマト栽培実習が組まれた。第1花房が咲き始める苗を準備しなければならず、盛夏期育苗による軟弱徒長や花芽分化不良、花房の欠落などの障害が危惧され、鹿島石油時代の高湿乾燥地の野菜栽培、耐潮性樹木選抜試験、礫耕による

室内緑化などの経験があっても大きな不安を感じていた。農業大学の講師や農業科学アカデミーの研究員などを含む研修員に納得される品質の苗を準備するため土日も休まず大汗をかくて苗作りをしていたが、計画通りの栽培実習になったのは良い思い出である。

研修員にとって日本での栽培を体験する実習は技術を理解する上で重要なカリキュラムである。出来るだけ農家の標準的作業を伝え、質量共に高い生産技術であることを体験できるように努めた。スイカの挿し接ぎ育



2000年タジキスタン研修

苗では初期ステージの密閉管理導入で成功率を向上させ、梅雨明けから生育不良を起こすパプリカ養液栽培の改善には点滴給液を導入、火山灰土の実習圃場におけるタマネギ栽培にはセル育苗、黒マルチを導入し大玉果・可販果率の向上などの実習改善を行った。機械篩いとスピードポッターを使った培土の鉢詰めによる均一育苗には多くの研修員が苗半作のとっかかりと評価していた。今後はITの導入や化学分析データを活用した栽培初期からの生育診断や栽培管理、技術普及に使える

実践的技能向上に資する実習の改善を期待したい。

研修では、研修員が考えた課題実験を通じて技術習得を高めるようにした。2006～2018年間の139名の実験では20品目が供試され、課題は19分野となった。上位10品目中では圧倒的にトマトに係る実験が多く、11位以降はメロン、カリフラワー、トウモロコシ、ブロッコリ、ダイズ、レタス、インゲンマメ、カボチャ、ニガウリ、トウガラシであった。実験課題では適正窒素量の把握が多く、近年は鶏糞等の地域で入手出来る有機肥料・堆肥施用の評価が多くなってきた。

研修員と指導員が共に野菜を育てる過程を通じて技術習得を達成させる研修を今後も継続するためには、栽培技術に加えマーケティングや野菜の機能性などの情報収集と共に、生育診断能力の向上や研修員個々の研修目標を達成させるためのコーチング等の学びがこれからも欠かせない。

<おわり>

